

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

日教組 教育復興支援活動（岩手第7ターム）

### 【三重県チーム】

「2011.3.11 ここまで——」。これは、宮古市の飲食店の柱に記された記録です。海から1 kmのこのお店では、開店のための仕込みの最中でした。大きな揺れの後大津波警報発令。すぐに2階へ避難されたそうです。体験された地元の方のお話は、そのときの状況が思い描かれ、身震いするほどのものでした。

わたしたちは、宮古湾に面した海拔十数メートルの高台にある宮古市立高浜小学校で活動を行いました。地震直後、子どもたちは運動場への1次避難。保護者から児童の引き渡し希望がありましたが、大津波警報が発令の中、そのまま待機。その後大きな津波が押しよせてくるのが見え、すぐに裏山へ子どもと保護者とともに避難されたそうです。校舎への直接の被害はなかったものの、運動場は1.5mの浸水。車は浮き、引き波によりフェンスが壊れるという状況。子どもたちは全員無事ではありましたが、4割が被災するという大惨事となったそうです。未だ壊れたままのフェンスが、大きな津波のつめあとを物語っているようでした。



高浜小学校での活動は、図書書の整理、扇風機の組み立て、校舎まわりの草取りが主な内容でした。



2学期が始まっていたので、給食を一緒に食べたり、休み時間に遊んだり、子どもたちとふれあう機会もたびたびあり、元気な子どもたちの様子に、わたしたち自身がはげまされた気がします。また、他県教組が活動をした学校では、卒業制作の整理や泥や海水にまみれた書類の整理等、学校現場を知っているものでなければできない仕事も多々ありました。「自分たちの活動が、本当に学校支援となっているのだろうか」という思いもありましたが、教職員が本来の業務に集中していただくことができれば…という思いで活動しました。

東北の被災地支援は、今後も続くであろう、長い活動となります。今回の学校支援を通して、地元の方をはじめ他県教組の仲間など多くの人々に出会いました。たくさんのお話も聞きました。わたしたちが「見て」「聞いて」「感じた」ことを子どもたちにしっかりと伝えていきたい、そしてともに考えていきたいと思えます。三重県でも、東海、東南海、南海地震の連動発生が危惧されています。子どもたちの命を守るために、何をどうすべきか、東日本大震災から学んだことを教訓として、つながりを強固にしていきたいと思っています。



## 【秋田県チーム】

秋田県教組は被災地に近いということで独自ボランティアとして2回、21人を夏休みに宮城県南三陸町へ派遣、横手支部も独自で3月（釜石市）と7月（大船渡市）にボランティアを派遣しました。今回の日教組独自ボランティアには5人を出し、連合・日教組ボランティアにも12人を出しました。第7タームには3人が新たに参加しましたが、何度来ても沿岸部は大変な状況のままでした。

少しでも仲間の手助けがしたい、との思いで私たちは日教組主催のボランティアに参加しました。割り当てられた宮古工業高校は郊外の田園地帯にあり、防波堤を越えた津波が校舎1階の1メートルほどまで床上浸水したそうです。学校前のグラウンドに押し流されてきた住民を実習道具で加工した筏で数人助け出したそうですが、あまりの惨劇に身体が震えたそうです。市内の水産高校と商業高校を仮住まいにして勉強しているため生徒とは触れ合えませんでした。泥水に浸かった重要書類の再生が私たちの3日間の作業でした。



初日は岩手高教組の加賀谷女性部長の手ほどきで真似したものの成果が得られず、自己流の悲しさがありました。2日目は自己流が悦に入り、大量の簿冊を復元することができました。チラッ、チラとページを見ると重要な文書もありましたが私たちを信頼し任せてくれた学校に対し敬意を払い、守秘義務を守ることを3人で誓いました。

26日に机移動があるのでもう2日滞在することになり1日、自由時間ができました。テレビ

でよく目にした宮古市田老地区や津波の高さ40.5メートルの姉吉地区、山田町にも行ってみました。一辺が10メートルはあろうかというコンクリートブロックが横倒しになるなど想像を絶する津波の力にただただ驚くばかりでした。

4日目は第8タームの方々と秋田県教組からの応援5人、岩手高教組のボランティア・チームで宮古工業高校へ机・椅子・教材等を運び出しました。1日予定を午前中で終わらせ、午後

は生徒玄関前の除草と側溝の泥上げなどに汗を流し、日曜から金曜日まで宮古市に滞在させて頂き、目標を達成しました。

最後に「本日、水揚げされたサンマ」のニュースを見ながら食べる刺身は最高の味でした。一日も早い復興を願って「頑張ろう岩手・宮城・福島！！」



## 【富山県チーム】

私たちは「第7ターム・チーム3」として、大槌北小学校でボランティア活動をしてきました。行った活動は、体育館2階ギャラリーの掃除、片付け、仮設校舎で使う机・椅子の水拭き、復興支援で送られてきた物品の整理、移動、などです。

ギャラリーは、津波で跳び箱や卒業制作のひな壇、机、椅子などがめっちゃめっちゃにひっくり返っていたり、汚泥がたまっている状態でした。使えなくなったものを片付け、跳び箱や卒業作品、運動会入場門などを1階に運び、汚泥を取り除いた後、また2階へ運び整理・整頓しました。しっかりと活動を行うことができ、お役に立ててよかったと思いました。きれいになったギャラリーを見て、みんな笑顔になりました。

また、大槌北小学校の子どもたちが、間借りしている吉里吉里小学校の体育館で元気に授業をしている姿を見て、私たちが勇気や元気をいただいた気がします。

なお初日は、田老地区のスーパー堤防や観光資源となっている龍泉洞など視察してきました。津波の威力を感じると共に、復興の槌音も感じる事ができました。

関係者のみなさん本当にありがとうございました。被災地の一日でも早い復興を祈念しています。

## 【千葉県チーム】

日教組被災地支援・教育復興ボランティアの第7タームに参加した4人の千教組のメンバーは、8月22日～24日の3日間、宮古市宮古湾最深部にある小さな小学校にてボランティア活動に参加しました。

震災当日は、児童・教職員とも高台にある小学校にいたため全員無事だったそうですが、児童の約半数の家庭が住む家をなくしたとのことでした。作業中は、遠くで重機の動く音がすることと、グラウンドには仮設住宅があることを除けば、日常の学校生活と変わらない錯覚さえ覚えるほどでした。

主な作業は図書の整理、廃棄物の処理、花壇の整備などでした。図書の整理では、全国から届けられた4,000冊のうち、手つかずの図書を分類し、シールを貼りナンバリングして、データをパソコンに入力しました。善意で送られた図書とはいえ、被災地の学校に新たな負担を生んでいる現実に支援物資の難しさを実感しました。

作業2日目、分会長と校長先生のご配慮で、作業の後、夕食をご一緒する機会を得ました。「震災から数ヶ月間は学校で過ごすことがほとんどだったが、ようやくボランティアの方と夕食を共にできる余裕がでてきた」、また「街の復旧はこの5ヶ月間でずいぶんすすんだが、仕事はなく、失業保険すらもらえない人が多い」とのことでした。実際に街中には既に瓦礫はなく、多くの店も開業し、生活に不自由は感じませんでした。一方、致命的な被害を受けた漁港や各種工場は、まだ鉄骨だけの建物の姿が目立ちました。

2学期は8月17日からスタートしており、子どもたちは落ち着いた様子で過ごしていました。給食や昼休みを共にする中で子どもたちの笑顔に接し、心が温かくなりました。地域の産業が復興し、地域の子もたちが将来にわたって安心して生活できる「街づくり」が実現するまで、これからが本当の復興であろうと感じました。



校長先生、分会長と千教組参加者



グラウンドに設置された80世帯の仮設住宅



図書整理の様子



お昼休み 子どもたちとドッジボール